

わ

が

街

わ

が

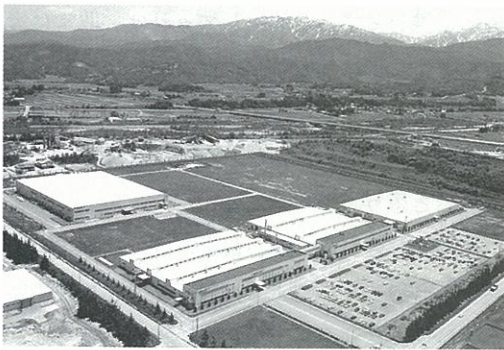
故

郷

なめりかわ
(株)不二越 滑川事業所と滑川市

広大な日本海と3千メートル級の雄大な北アルプス立山連峰に囲まれ、さわやかな大気と美しい緑、豊かな大地に恵まれた「滑川市」。市の中心から北東方面に、(株)不二越の滑川事業所があります。

滑川事業所は、1984年に(株)滑川不二越として設立され、その後1994年に(株)不二越と合併し、現在に至っています。



滑川事業所

事業所では、現在、静圧ベアリングの一種である油静圧ねじを組み込んだナノメータの送り機構の精密機械をはじめ、コーティング装置や工業炉、そして自動車のトランスミッションに多く使われているソレノイドバルブなど滑川のクリーンな自然に相応しい高精度な製品を生産しています。

《滑川市の紹介》

滑川市は富山県の中央部からやや東北寄りに位置し、農林漁業と商工業の調和がとれた人口約34,000人の街です。

“滑川”は、原名『波入川（なみいりかわ）』から由来し、富山湾の波が川を逆流する様子から名付けられました。古くは、平安末期の文治2年（1186年）の文献でその地名を確認することができます。漁業でもその歴史は古く、滑川港沖合いは有名なホタルイカの生息地でもあります。また、陸上交通が発達していない古い時代には、滑川の港から東西へ航路がのびていて、物資の出入りがあったことが記録に残されています。海岸線に沿って東西に通っている街道は、藩政時代に「北陸街道」と呼ばれ、参勤交代の通路として加賀から越後に続く主要道でありました。当時は宿場町として栄え、古い町名や民家の建築様式に、当時の町並みや通りの様子を想像させてくれるものが残っています。

滑川の土地は、現在でもおよそ半分は水田稲作に利用されていますが、大型企業の立地が相次ぐなど、工業都市としても発展しています。

《滑川の見どころ、周辺の紹介》

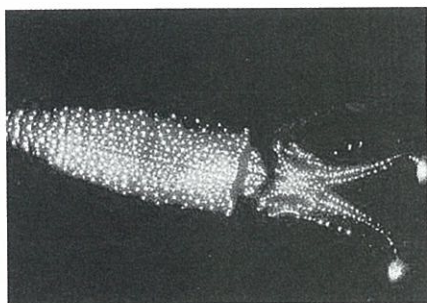
ほたるいかミュージアム

富山湾のホタルイカの生態や自然環境などを

教育・観光的にとり上げたミュージアムです。春のシーズン中は、ライブシアターでホタルイカの発光シーンを見ることができます。四季を通して、海の魅力とホタルイカの神秘を体験し、参加できる体感型の展示施設として人気を集めています。

(ホタルイカについて)

体長わずか5センチほどの小さなイカです。全身に多数の発光器をもち、外敵への威嚇のために発光します。ホタルイカの大群の発光が見られるのは日本でも滑川近くの富山湾に限られていて、その群遊海面は特別天然記念物に指定されています。毎年4月中旬から5月上旬にかけて滑川漁港からほたるいか観光船が出航し、産卵のために200メートル以上の深海から南風に乗って富山湾沿岸に押し寄せてくるホタルイカが、夜明け前の海上で幻想的にきらめく不思議な光の群れが堪能できます。



ホタルイカの発光体

タラソピア

近年注目を集めている海洋深層水を利用した世界初の健康増進施設で、愛称を「タラソピア」といいます。

海水や海洋環境によるリラクゼーションを基調とした海洋療法(タラソセラピー)が、現代人のストレスを解消し、心と身体を癒す優れた健康増進法として注目されています。滑川市がこの点に着目して、いち早く建設を進めました。

この施設では、ホタルイカが棲息する富山湾の深層水を使ったタラソセラピーが体験できます。



タラソピア

(海洋深層水について)

海洋深層水とは、大陸棚より沖合で太陽光が届かない水深にある海水のことで、一般的に水深200m以上の海底にある海水をいいます。雑菌や汚染物質が少なく、わたしたちヒトに必要なマグネシウム、カルシウム、カリウムなどのミネラルを多く含んでおり、無限の可能性を秘めた海洋資源です。深い海が海岸の近くまで迫っている富山湾の取水しやすい海底地形を利用して、さまざまな研究が進められています。また、深層水は商業利用を目的とする企業などへも供給され、これまでに発泡酒やシャンプー、化粧品、パン、うどんなど、深層水を利用した多彩な商品が次々と発売され、高い評価を得ています。

不水掛遺跡公園

東福寺野自然公園の駐車場予定地で縄文時代中期の竪穴住居跡が4棟発見され、不水掛(みずかからず)遺跡公園として保存されました。竪穴住居は3棟が復元され、中に入ることができます。縄文時代の遺跡の多い富山県内でも、当時の模様を再現した数少ない復元集落です。隣接して遺跡展示館があり、不水掛遺跡や滑川市内の遺跡出土の土器などが展示されています。

蜃気楼（しんきろう）

滑川市近郊の魚津は“蜃気楼の見える街”として有名です。蜃気楼とは、海面近くに温度の違う空気の層ができることによって光が屈折を起し、遠くの風景などが伸びたり反転した虚像が出現する不思議な現象です。名前は、“蜃（しん）”と呼ばれる大ハマグリが、沖合で“気”を吐き出し、空中に“楼（高い建物）”を出現させる、と考えた中国人の想像に由来するといわれています。富山湾（魚津海岸）の蜃気楼は主に春から初夏にかけて、暖かくて風の弱い、よく晴れた日の午後に現れることが多く、富山湾の春の風物詩として全国でもよく知られています。



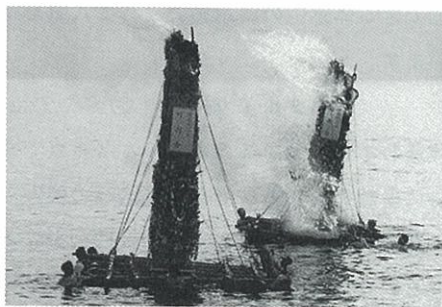
蜃気楼

《滑川の民族行事》

ねぶた流し

ねぶた流しとは、厄よけ・無病息災を祈り、毎年7月31日の夕刻に中川原海岸で行われる行

事です。紙や野菜で作ったヒトガタ(人形)を4メートル余りの松明(たいまつ)に飾り、これに火をつけ海に流します。天正13年(1585年)、佐々成政を攻めるために滑川に上陸した豊臣秀吉軍



ねぶた流し

の中に病気が蔓延し、ワラで身をこすり火をつけて海に流して、悪疫退散を願ったのが起こりといわれています。形見を流すことで病を一緒に流すという、古来からの風習が変化したもので、国の重要無形文化財に指定されています。

（株式会社不二越 総務部広報 久金 康彦）
（株式会社不二越 東京業務部 北野 亮）
資料・写真協力：滑川市役所

